

## Ⅱ－４ 調査される側にとって森岡清美の調査経験が もたらしたもの

### ——1950年代の浄土真宗寺院調査にかんするリスタディから——

庄子 諒

本稿では、森岡清美の研究成果および調査資料群のうち、1950年代の浄土真宗寺院調査についての記述や資料、さらにインタビュー調査によるリスタディにもとづいて、当時の森岡によるフィールド調査が、とくに調査協力者側にとっていかなる経験をもたらし、その後にいかなる影響を残していったのか、その一端を明らかにすることを目的とする。そのことをとおして、かならずしも研究成果に明記されない過去の社会調査の実際について、調査される側にとって調査経験がもたらしたものという側面から考察を行う可能性を探る。

#### 1 1950年代のふたつの浄土真宗寺院調査

社会学者・森岡清美による初期の主要な研究成果のひとつに、1960年に彼の博士論文へと結実することになる浄土真宗教団についての宗教社会学的研究が挙げられる。そのうち、現在アーカイブ化を進めている森岡清美調査資料群のなかにその調査資料がふくまれているとともに、上記の真宗教団研究全体を貫く重要な着想を得たといえる、ふたつの真宗寺院調査がある。ひとつは、1952年から2年間参加することになった九学会連合<sup>(1)</sup>の能登における共同調査のなかで開始され、その後も数年にわたる単独調査が重ねられた、現在の石川県輪島市町野町金蔵にある真宗大谷派・正願寺での調査である。もうひとつは、1957年から数年にわたる単独調査が行われた、現在の福井県坂井市三国町加戸にある真宗高田派・本流院での調査である。

前者の正願寺調査を中心とする石川県での真宗教団調査のおもな成果は、九学会連合の機関誌『人類科学』に掲載された論文「町野町川西における真宗門徒の教団内婚」（森岡 1954）や、九学会連合能登調査の報告書である『能登——自然・文化・社会』の第2章「宗教生活——鳳至郡町野町川西の真宗門徒団を中心として」（池上・森岡・土屋 1955）へとまとめられる。また、後者の本流院調査を中心とする福井県での真宗教団調査のおもな成果は、喜多野誠一・岡田謙編『家——その構造分析』のなかの論文「真宗教団における寺連合の諸類型」（森岡 1959）や、東京教育大学文学部の紀要『社会科学論集』に掲載された論文「真宗大坊をめぐる合力組織」（森岡 1960）へとまとめられる。そして、いずれの成果も博士論文へ、ひいては森岡自身が「この本で、宗教社会学者としての私の評価が確立したとってさしつかえありません」（森岡 2006:119）と述べる単著『真宗教団と「家」制度』（森岡 1962）へと吸収され、森岡による宗教社会学的研究の集大成の中核をなすことになる。

さて、われわれの研究会では、研究者によって蓄積されてきた社会調査データや社会調査の実践の営み全体を、社会科学的な調査遺産、「リサーチ・ヘリテージ」（小林 2018）として積極的に継承し、現代の社会調査に活かしていく目的を念頭に、森岡清美調査資料群の整理や分析にあ

たってきた。そのなかで、森岡による研究成果の講読、これまでの調査実践や調査資料についての解説を中心とした森岡へのインタビュー、そして、当時の調査の経緯を跡づけながら当該地域の現状を把握しリスタディを進めるための現地調査などを行ってきた。それらをとおして見出された着眼点のひとつとして、本稿がふたつの真宗寺院調査から学びとろうと試みるのは、当時の森岡による調査が、調査される側の人びとにとっていかなる経験をもたらし、その後にいかなる影響を残していったのか、ということである。

というのも、この真宗寺院調査における出会いややりとりが、調査者である森岡の研究遍歴のなかでも非常に印象深いものになっていると同時に、調査協力者となった人びとの側にとっても、その後の人生のなかで思い起こされ、影響を及ぼすことになる、おおきな経験をもたらしただということがわかったからである。

## 2 問いの所在——調査する側がされる側にもたらしたもの

### 2.1 調査地被害とさまざまな迷惑

「私の真宗教団研究を加速」（森岡 2006:119）させた調査として彼がふりかえるのが、1952～53年の2年間参加することになった、九学会連合による能登での共同調査であった。ところで、九学会連合の共同調査といえば、調査者－被調査者関係の非対称性をめぐる問題提起の俎上に載せられ、戦後日本の社会調査史において欠かすことのできない参照点のひとつとなっている。その共同調査において中心的な役割を担ったひとりである、民俗学者・宮本常一による「調査地被害」の議論のことである。

宮本常一の論考「調査地被害——される側のさまざまな迷惑」（宮本 [1972] 2008）では、九学会連合の共同調査での出来事にも触れながら、「人文科学が訊問科学に」（宮本 [1972] 2008:15）のフレーズに象徴される、調査者のさまざまな権威主義的なふるまいや意識が紹介されている。問い詰め型の聞きとりから、偏見理論の押しつけ、現地のさまざまなものを略奪していく姿まで、調査される側にもたらされてきたさまざまな「迷惑」が暴かれ、フィールドワーカーとしての自省が込められながら、それらのことが痛烈に批判されている。調査する側／される側の権力関係を指摘した「調査地被害」の議論は、フィールドワークにおけるポリティクスが問題化されはじめた同時代的な潮流とも共振するものであった。

この論考には、九学会連合の能登調査と連動して宮本らが行った古文書収集調査事業が、研究者と地元住民との関係に禍根を残してしまったという経験が反映されており、「調査地被害」の議論と九学会連合の能登調査は密接な関係にあるといえる（坂野 2012:93-103）。だが、九学会連合の共同調査そのものについて検討することは、本稿の目的ではない。ここで確認しておきたいのは、九学会連合の能登調査をふくめ、過去の社会調査が調査される側の人びとに対してもたらしてきたものとして、まずもって、歴史的にさまざまな「被害」や「迷惑」の存在が指摘されてきたということだ。研究者によるその自覚と反省とが、いまま調査研究における疑いのような教訓や戒めとして、社会調査の方法論をめぐる議論の原動力のひとつとなっているといえる。そして、そのことは同時に、調査する側はされる側にその「お返し」をもたらしすべきだ、という志向を導くことになる。

## 2.2 「お返し」としての研究成果の還元

宮本は先の論考の冒頭で、渋沢敬三から「調査というのは地元から何かを奪って来るのだから、必ずなんらかのお返しをする気持はほしいものだ」（宮本 [1972] 2008:15）と教えられたことを紹介している。宮本の議論を引き継ぐかたちで、人類学者の安溪遊地（2012）は、調査する側がされる側に与える「迷惑」に対し、免罪符のように言われてきたのが「研究成果の還元」であるとして、それが可能か、正しい還元とは何かについて考察を行っている。たとえば報告書を送るだけではなく、現地への還元の方法はさまざまに模索されているが、それらへの意見もさまざまである。安溪は「研究成果の還元」という言葉に「する側がされる側から得た多くの物の一部を返すという意味合いがどうしても感じられる」と述べ、「研究という営為が、する側とされる側の一体となった活動を意味し、『研究成果の還元』という言葉が死語になる時代がこなければならぬ」としている（安溪 2012:111）。

調査する側からされる側へ「お返し」をもたらそうとして、あらゆるかたちでの研究成果の還元が模索されてきた。だが、「社会調査に参加することで、『お返し』として被調査者は何を得たことになるのだろうか」（桜井 2003:465）という問題意識に立って、過去の社会調査がされる側にもたらしてきたものを検討することは、十分に行われてきたとはいえない。桜井厚は、社会調査における調査者－被調査者関係のポリティクスと倫理の問題にかんする議論のなかで、たとえば被調査者個人にとっては、語りがたい自己の経験を調査者に語ることのカタルシス効果や、調査者との親交、調査をとおしたエンパワーメントなどをもたらすことがあるが、「それは結果としてありうるとしても、やはり調査の目的とまではないだろう」（桜井 2003:465）と述べている。

このことは、次のようなヒントを示してくれる。つまり、研究という目的、およびその目的達成の「お返し」としての研究成果の還元とは別のところで、社会調査とは、そうした主たる目的にはない、いわば間接的・副次的なさまざまな経験を調査される側へともたらすことがあるのだ。そのようにもたらされる影響や結果は、おそらく非意図的で予測しがたいものが多く、はじめから社会調査の目的あるいは「お返し」として位置づけることは難しいだろう。であるならば、過去の社会調査において、主たる社会調査の目的としての研究成果やその還元とは別のところで、される側へともたらされてきたものを経験的に明らかにしていくことができるとしたら、そこから学びとれるものは決して少なくないはずだ。

## 2.3 される側にとっていかなる調査経験であったのか

事実、過去の社会調査について、当時の具体的な調査実践や、調査協力者との関係構築の実際、その後の影響などにかんしては、かならずしもその成果物に直接明記されてきたわけではない。戦後科学史の観点から九学会連合の共同調査を分析した坂野徹も、とくに調査する側／される側の思惑のズレやすれ違いに着目したが、「それらは調査日記やフィールドノートに記されこそすれ、論文や著作などの公刊物に書かれることは少ない」（坂野 2012:158）と述べ、自身の分析についても、そうした未公刊資料を活用することができなかつた点を課題として挙げている。

たとえば当時のことが記された調査資料、調査者の日記、当時をふりかえって書かれた研究者

の自伝などのパーソナルドキュメント、当時の調査者／調査協力者による経験的語りといったデータは、たいへん貴重な手がかりとなる。そうした資源を活用して過去の社会調査の蓄積をとらえかえすことで、その時代に研究者が現地を訪れ、人びとに出会い、関係を築いていったフィールド調査の過程の実際や、その後の影響に至るまでのことが浮かびあがってくる。そこから、社会調査について現代のわれわれが学びうることは多いはずだ。

調査する側がされる側にもたらしうるものは、「被害」や「迷惑」といった一面的な解釈では片づけられない。あるいは、研究成果の還元といった意図的な「お返し」にもとどまらない。たしかに、社会調査では調査協力者側に少なからぬコストを強いることが避けられない意味で、大なり小なり「迷惑」をもたらししているとはいえるし、得られた研究成果からその「お返し」をしようとするのは正しい。だが、たとえそうであったとしても、ひととひとが出会う調査過程の実際をふまえれば、社会調査は同時に、思いがけず、される側の人びとにとってそれぞれに多様な経験をもたらしうる。それらの経験を、社会調査の間接的・副次的な結果と呼んでもよいだろうが、社会調査がそもそも避けがたくそうしたものをもたらすのだとすれば、社会調査を考えるうえでけっして周縁的な問題ではない。される側にとっての多様な調査経験という視座に立って、それぞれの具体的な社会調査の営みのなかでもたらされてきたものをとらえかえし、過去の社会調査の実際を探究することが、そこから何かを学びとる方途のひとつとして必要なのではないだろうか。

豊かな研究成果を生みだしてきた過去の社会調査が、調査される側にとって実際にいかなる経験をもたらし、その後にいかなる影響を残していったのかを現在から遡及的に探究すること。それは、過去の社会調査の蓄積を社会科学的な遺産としてとらえ継承することをめざすリサーチ・ヘリテージの観点から見て、それらを活かし、さらに豊穡なものにしていく重要な着眼点のひとつであると考えられる。次章からは、そのケーススタディの試みとして、森岡清美による1950年代のふたつの浄土真宗寺院調査を取りあげ、考察を進めてみたい。

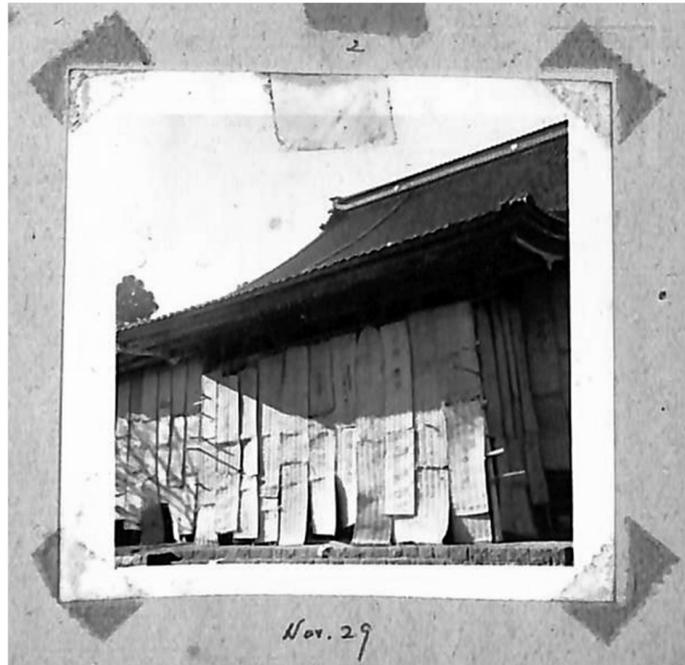
### 3 石川県町野町・正願寺での調査から

#### 3.1 概要

町野町における森岡の真宗教団研究では、いくつかの寺院および川西集落を中心とする門徒への調査が複合的に展開されたが、それらの調査の拠点となり、多くの示唆を得ることになったのは、正願寺であったという。森岡の自伝やインタビューでの語りでは、彼の研究史上のひとつのおおきな転換点として、また、思い出深い調査経験として、この正願寺での調査のことが述べられており、本稿ではその点に注目する。

あわせて、われわれは、石川県における真宗教団研究の成果および調査資料についてのリスタディを目的に、2017年11月29・30日、能登調査地訪問調査を実施している。2日目の30日には正願寺を訪問し、現住職である松原洋氏（1942～、訪問時75歳）へのインタビュー調査を行っている。森岡による1950年代の調査当時は、父である先代の松原実氏（1909～1989）が住職を務めており、その長男である洋氏はまだ10代であったため、直接的に調査協力者となったわけではない。

調査される側の調査経験へのアプローチとして、本稿で対象とする調査が1950年代に行われた



薦による雪囲がなされている1950年代の調査当時の正願寺本堂  
(1953年11月29日、森岡清美撮影、森岡提供の当時のアルバムから引用)



雪囲がテントへと変わった2017年現在の正願寺本堂  
(2017年11月30日、筆者撮影)

ものであるという事情から、当時の調査協力者本人から当事者としての経験そのものを聞くことができない点は、現在からふりかえろうとする本稿の限界といえる。しかしながら、直接の調査協力者ではなかった洋氏へのインタビューのなかで明らかになったのは、森岡の調査が、調査される側の人びとに、とりわけ少年だった洋氏にもたらした意外な影響であった。そこからは、かならずしも調査協力者本人にとどまらない、調査される側にとって調査経験がもたらすものの多様さや広範さが明らかになったといえるだろう。

### 3.2 調査する側にとっての調査経験——「ターニングポイント」

まずは、森岡の自伝における記述（森岡 2012）およびインタビューでの語り<sup>(2)</sup>から、正願寺での調査が、調査者にとってどのような調査経験であったのかについて整理したい。

1952年、東京教育大学で講師を務めていた当時28歳の森岡は、九学会連合能登調査委員会委員に委嘱され、「奥能登における新旧文化の接触」を調査題目とする第6班の一員として、町野町およびその周辺の宗教生活にかんする調査を担当することになった。結果的にはほぼ単独で調査を進めていくことになるのだが、彼は町野町全域の真宗寺院を調査するとともに、とくに川西という集落を集中的に分析することになる。インタビューによれば、その選定の経緯は、現地で話を聞くなかで「おそらく真宗の門徒の行事をずいぶん熱心にあそこはやっているということで川西に行った」（2017.11.24）とのことであった。調査資料群には、川西の全世帯にかんする調査票や名簿、緻密にまとめられた表や地図、フィールドノートなどが残されており、一軒一軒をめぐり丹念に調査したことが伝わる資料である。

川西に寺院は存在しないため、当時は全世帯が近在するいくつかの浄土真宗および真言宗寺院の檀家となっていた。隣接する金蔵集落にある正願寺も、そのうちのひとつであった。森岡は、川西に関係するほかの寺院も巡ったが、「正願寺のほうがいよいよ面白くて、結局正願寺さんに落ちてしまった」（2017.11.24）という。以降、九学会連合の2年間の共同調査が終了した後も、調査研究は単独で継続され、川西とともに正願寺が集中的な分析対象となっていく。正願寺がとくに魅力的であった理由には、活発な宗教生活が見られた点とともに、そこに真宗教団の構造が見てとれた点にあった。

浄土真宗の寺関係の基礎的な形、それから寺と檀家の関係の基礎的な形、それから檀家自体の基礎的な形、これが川西、それから正願寺を中心にひとそろいそろっているわけです。（2017.11.24）

このことが、先に挙げたいくつかの研究成果における、真宗門徒団の組織と活動にかんする分析を可能にしたといえる。それは、地域の宗教生活を明らかにすると同時に「宗教的側面を通して家生活と家結合とを分析する試み」（池上・森岡・土屋 1955:212）でもあった。加えて、寺院関係の構造について、奥能登のおおきな真宗寺院では、本坊に対して子寺と呼ばれる従属寺院を抱えており、これらのことが真宗寺院の寺檀関係や本末関係についての独自の視点を構築する手がかりとなったことが述べられている（森岡 2012:107）。

先述したように、奥能登での調査の成果が、1962年刊行の『真宗教団と「家」制度』の方向性

を開く知見をもたらすことになる。そのことを、森岡は次のように語っている。

私の本は結局、金蔵の正願寺が起点なんですよ。正願寺の寺院構造を教団から、教団全体を理解しようと。理解できる例を初めてみてね、それで真宗教団の組織構造のいわば原型というか、ひとつのいちばん集約した単位みたいなね、それをおおきくすれば真宗教団になるというその原型みたいなものをみて、そこで真宗教団を全体的にとりあつかう方向性が開けたんですね。ですから、私にとってはこれは非常に記念すべき、1962年の本がこれで本格的な見方を獲得した。(2014.2.24)

このように、正願寺での調査は「ほんとうにね、真宗教団がわかったという」(2014.2.24)収穫をもたらした点で、森岡自身の研究史の「ターニングポイント」(2017.11.24)となったといえる。しかし、正願寺での調査は、そうした研究成果に表れる豊かさにとどまらず、たとえば親鸞の祥月命日にあたって営まれる真宗最大の年中行事・報恩講への一週間にわたる参与観察をとおしてその「盛況を徹夜で体験した」(森岡 2012:107) ことなど、「正願寺と川西には非常に思い入れが深い」(2014.2.24)と語られるように、それ自体が思い出深い調査経験として記憶されている。次節ではそのなかから、調査をとおして築かれた調査協力者との親密な関係性がうかがえるひとつのエピソードを取りあげてみたい。

### 3.3 調査協力者との関係性——「アメリカ人が来るので浴室を改造した」

単独での反復調査を終えた後の1958年8月、森岡は米国諸大学現地調査員(American Universities Field Staff)であったオルソン氏の依頼で、彼を伴って正願寺を訪ね、数泊したという(森岡 2012:107)。その際のエピソードが、インタビューのなかで語られた。

アメリカのオルソンという、フィールドスタッフという肩書きでしたけれども、その一隊を一緒に連れていって、それも歓迎してくれてね。来るなら浴室をすこし改造しなければいけない。アメリカ人が来るので浴室を改造した。そうしたら、オルソンが言うには、浴室を改造するのは大変な行為でしょう。アメリカ人の考えでは浴室よりもっといいところが(笑)。いやいや、面白くてね。(2017.11.24)

幾度にわたる調査での訪問をとおして、当時の調査協力者である松原実住職はじめ正願寺の人びとが、森岡たち研究者をどのように迎え入れてきたのかがうかがえる。しかし、若い研究者として喜んで受け入れる雰囲気があったのかについて、森岡は「そんな気持ちもないと思いますよ。若い研究者なんて気持ちはない。ただ、東京から来た面白いやつがいるというだけではないですか」と答え、研究者を育てようといった発想ではなく、「当人たちは、研究者は役に立つとはあまり思っていなかったわけです」と付け加えていた。いずれにしても、「私がいつの間にか入り込んでしまったから」と語る森岡は、住職夫妻とよくいろいろな話をして過ごしたそう。また、当時10代だった洋氏については、「洋さんは長男ですけど、まだ小さかった。洋さんとはあまり話したことない」と語っている(2017.11.24)。

森岡によれば、正願寺の人びとはどちらかという、彼を研究者として迎え、研究者として接したというわけではなさそうだ。もちろん調査への多大な理解と協力がありながらも、幾度の滞在のなかで、調査をとおした関係性にとどまらないやりとりを重ねながら、遠くからの来訪者として温かく迎え入れてきたように感じられる。もし「研究者は役に立つとはあまり思っていなかった」という言葉をそのままに受け止めるならば、翻って、研究者として調査協力者に研究成果を還元しようといったいささか形式的な態度は期待されておらず、むしろ堅苦しく歓迎されざる態度だったとさえいえるのかもしれない。

### 3.4 調査される側にとっての調査経験——「アメリカのほうへ、行きたいな」

最後に、正願寺での調査が、調査される側の人びとにとっていかなる経験をもたらしたかについて、正願寺の現住職である松原洋氏へのインタビューから明らかにしていきたい。

1942年生まれ、の松原洋氏は、1950年代の調査当時は10代であったが、森岡らの訪問を覚えているという。とくに、前節で触れたオルソン氏を伴った滞在が、彼の人生にとってひとつの転機となる経験であったことが、インタビューのなかで語られた。本節では、調査される側の人びとにとっての調査経験について、直接の調査協力者ではなかったものの、研究者を迎え入れる側として当時を経験した松原洋氏の語りから明らかにしたい。

当時の松原実住職の長男である洋氏は、大谷大学を卒業した後、インド哲学の研究の道に関心をもって京都大学大学院に進学し、さらにはカリフォルニア大学大学院に留学してそこで哲学の博士号を取得した。その後は、金沢工業大学で教鞭をとりながら、1989年に先代が逝去した後には金蔵に戻って住職も務めてきたという経歴を持つ。じつは、そうした彼のライフコース選択にとって、10代の頃に経験した森岡の訪問が関わっていたのである。洋氏は、アメリカへの留学を志した動機について、次のように語っている<sup>(3)</sup>。

まあ、オルソンさんの影響も（笑）、あるような気がしてなりません。あの、当時はあの、英語がうまく口から出なかった、その、あの、なんちゅうか、残念な気持ちがありまして（笑）。それが、あの、アメリカのほうへ、行きたいなという気持ちを起こしてくれたんじゃないかなと思います。……森岡先生の口からはね、英語がスラスラ出てたんですけども、僕はどうも口から出なくて（笑）、あの、文法的なことばかり考えたりして（笑）、なかなかスラスラと出なかった記憶がございます。

1950年代当時、この地域では日常で外国人に出会うということ自体がきわめて稀であった。森岡がオルソン氏を伴って正願寺に滞在した際、彼らと接し、とくに森岡は英語を流暢に話しているのに対して自分はいま外国人とコミュニケーションをとることができなかったという経験が、10代の洋氏に、いつか海外に留学してみたいという気持ちを芽生えさせ、やがて洋氏は実際にその夢を実現させていったのであった。

洋氏が直接的な調査協力者であったわけではなく、この出来事が直接的な調査行為のなかに位置づけられるわけでもないだろう。また、このインタビュー自体が森岡の調査にかんする聞きとりであったことから、洋氏のこうした語りをより促すように作用した可能性についても、注意が

必要であろう。しかしながら、研究者である森岡の訪問から積み重ねられた調査協力者との関係性のなかで、調査される側の人びとへともたらされたこの経験が、間接的なものでありながらも調査経験のひとつとして洋氏の記憶に残り、彼のライフコースのなかのひとつの転機として語られるものになっていたのである。

## 4 福井県三国町・本流院での調査から

### 4.1 概要

正願寺での調査経験は、のちの森岡の寺院調査のスタイルに影響を与えていった。正願寺調査から数年後の1957年に訪れた、現在の福井県坂井市三国町加戸にある真宗高田派・本流院もまた、正願寺と並んでもっとも足繁く通い、仲良く付き合った寺院として印象深く記憶されている。本流院でも3年ほどにわたって一週間内外の長逗留を重ね、本流院を中心にして寺院関係の構造を分析していくことになった。本章では、この本流院での調査に着目し、それが調査される側にとっていかなる経験となり、いかなる影響を残していったのかを考察していく。

なお、本流院にかんしては、われわれが正願寺にて実施したような調査地訪問調査およびインタビュー調査を、現時点ではまだ実施できていない。また、後述するが、正願寺の場合と同様に、当時の調査協力者本人はすでに逝去されており、当事者の経験そのものを聞くことはできない。これらのことを踏まえ、本流院における調査協力者側へのアプローチにかんしては、今後の課題として引き続き取り組みを進めていきたいと考えている。したがって、本稿では、森岡による記述およびインタビューでの語りをデータとして用い、考察を行っていくことにする。そこから明らかになったのは、調査協力者との豊かな関係性と、そしてその後日譚としての、いわば正願寺でのケースとは対照的ともいえる出来事であり、森岡にとって忘れがたい調査経験となっていることであった。

### 4.2 調査する側にとっての調査経験——「浄土真宗の構造がこれで解けた」

こちらについてもまずは、森岡の自伝における記述およびインタビューでの語りから、本流院調査が、調査者にとってどのような調査経験であったのかについて整理したい。

森岡は、正願寺で得た真宗寺院の本末関係にかんする着想を深めるために、正願寺よりも規模のおおきい真宗寺院の調査を志していた。本流院を訪れることになったきっかけについて森岡は、「正願寺の本坊—子寺という重層構造をもつ、そういう寺をもっと調べたいと探していたところ。そしたらこれを紹介してくれる人がいて」（2014.2.24）と語っている。

本流院は、福井県下の高田派寺院のなかで、連枝格という無双の寺格をもち、約400戸の門徒と、従属度の異なる4つの従属寺院を抱えていた。森岡は調査を重ねていくなかで「本流院の構成を類型化すれば真宗教団の本末関係を論理的に分析できることに気づ」（森岡 2012:120）き、寺院関係のタテ軸の重層構造を見出すことを果たした。その経験について森岡は、「浄土真宗の本末関係の原型を私は正願寺で見た。それをさらに本流院で拡大して見たわけです。それで本が書けると思った」（2017.11.24）と語っている。

それだけでなく森岡は、組と呼ばれる寺院のヨコ軸での地域的結合にも着目し、1957年10月、丸々一週間かけて、本流院を拠点にして高田派福井県第一組全21カ寺を歴訪している。この悉皆調査をとおして、地域的結合の実際においては、寺院には独立身分／旧従属身分／従属身分の三類が存在しており、独立身分と従属身分の関係であるタテの「主従結合」、同じ身分の対等関係であるヨコの「組結合」に加えて、独立身分と旧従属身分との関係であるナナメの「与力結合」があることを発見した。調査資料群のなかには、このときの寺院の悉皆調査において記入されたひとつひとつの寺院の調査票が残されており、やはりその丹念な調査の実施が見てとれる資料となっている。

これらの成果は、現代の寺連合の諸類型の分析として結実する（森岡 1959）。それは、「一定地域での同宗同派寺院相互の関係にも斧鉞を加えたばかりでなく、従来農村社会学で定説であった組結合・同族結合の家連合二類型説に批判の一石を投じる」（森岡 2012:121）ものとなった。森岡は、本流院での調査経験を、改めて次のように語っている。

私はあそこへ行って真宗教団の構造が分かりました。それでこの本を書けるようになった。……浄土真宗の構造がこれで解けたと思いました。浄土真宗だけではなくて仏教教団全体の本末関係とかいろいろです。（2017.11.24）

「この本」とは、『真宗教団と「家」制度』のことである。三国町での調査を継続していた1959年頃に「私の真宗教団研究も効率の臨界点付近に達した思いがしていた」という森岡は、1960年の年頭に「いよいよ研究のまとめをする年を迎えた」と考え、熟成の段階に達した真宗教団研究を、博士論文へとまとめあげることになる（森岡 2012:124）。

こうして、この本の中核をなす重要な成果をもたらした本流院調査もまた、調査協力者との関係性を築いていくなかで、森岡にとって思い入れの深い調査経験となっていることがうかがえる。その関係性の構築は、調査を豊かなものにするうえでも欠かすことができないプロセスであったようだ。次節からは、森岡による記述と語りからその点を見ていきたい。

#### 4.3 調査協力者との関係性——「そういう癖がついた」

森岡の自伝では、三国町での真宗寺院調査について、「調査の舞台裏」というタイトルのついた項で、調査協力者である寺院の人びととの親交が、たいへん印象的に綴られている（森岡 2012:121-3）。本流院にかんする記述を引用したい。

本流院には年に何度か長逗留させていただいて調査をした。住職の秦英西師（一九二〇～一九七二）とはウマが合うというか、いつも私の逗留を心待ちにしている、私があまり迷惑をかけてもと金津駅前や芦原温泉に宿をとれば、機嫌がわるかった。一時間あまり聴取調査をすると、「もういいでしょう」と云って奥さんが準備した酒肴を自分で運んでくることがよくあった。（森岡 2012:121）

当時の住職の秦英西氏（1920-1972）は、1923年生まれの森岡とほぼ同世代で、ともに当時30

代であった。1963年には、上京した住職が森岡の自宅を訪れ、宿泊したこともあったという。調査での訪問をとおして、秦氏とはとても親しい関係性が築かれていったことがわかる。森岡は、そうした調査のスタイルについて、正願寺での経験を踏まえて、「本流院というところでまた同じことをやるわけです。そういう癖がついた(笑)」(2017.11.24)と語っている。本流院における調査協力者との親密さを感じさせるエピソードは、森岡へのインタビューのなかでも度々触れられ、思い出深い調査経験となっていることがうかがえる。

ところで、「調査の舞台裏」の項では、調査協力者である寺院の人びととの酒の席にかんするエピソードも紹介されている。それは、本流院からほど近い松樹院という別の寺院での出来事だが、2時間ほどの調査が終わると、住職が「大きな薬缶で燗をした清酒を特大の湯呑み茶碗になみなみと注いで、勧めてくださった」という。そして、「注しつ注されつよい気分になったころ、彼が語りだしたのは組内住職間のデリケートな人間関係のあれこれであった」。すなわち、先述した現代の寺連合の分析において、「組内住職間の派閥関係にかんする部分は、面接調査で探りだした秘話ではなく、飲み交わす酒の席での予期せぬ打ち明け話を整理したもの」だったのである(森岡 2012:122)。まさに「調査の舞台裏」での調査協力者との関係性の構築は、親密さを深めるだけではなく、予期せぬかたちで表舞台の調査自体での発見を深めていく契機ともなったようだ。三国町での真宗寺院調査が稀有な研究成果を導いた要因として、こうしたいわばインフォーマルな調査協力者との関係性の構築過程は、けっして欠かすことができないものだったといえるだろう。

#### 4.4 調査される側にとっての調査経験——「ちょくちょく来て話を聞いてくだされば」

最後に、本流院での調査が、調査される側の人びとにとっていかなる経験をもたらしたかについて、先述したように限られたデータにもとづく考察となるが、森岡による記述と語りから探っていきたい。このことに関連する思いがけない出来事が、本流院調査が森岡にとって忘れがたい調査経験となっているおおきな理由であるといえるだろう。ふたたび「調査の舞台裏」の項から、その記述を引用したい。1963年に森岡の自宅にも泊まったという本流院住職とのその後についての、衝撃的な経験である。

その後一〇年近くご無沙汰しているうちに、電動鋸で手を怪我したのが引き金になって、自死してしまった。葬式に会することができなかったので、一九七五年九月、講演で富山市へ出張した帰途弔問したところ、奥さんから「もっとちょくちょく来て話を聞いてくだされば、死ななかつたのに」と云われ、生前の格別の厚誼を回想して身が縮む思いであった。門徒から「オカミ」と呼ばれる彼には、同派僧侶にもまた門徒にも、心を割って話せる人がいなかったのであろう。私は聴取調査をしながら、とくに意識することもなく、彼の鬱屈した思いに耳を傾けていたのである。(森岡 2012:121)

先述したように、1957年から数年にわたった三国町での調査を終える頃、博士論文をまとめあげて真宗教団研究に一区切りをつけた森岡は、その直後の渡米とともに、家族社会学を主要な研究領域としていくことになる(森岡 2006:121)。帰国後も、自身の研究のみならず学会役員や大

学教員としての多忙な日々を送るなかで、かつての真宗教団研究の調査地を訪れることはなかなか叶わなくなっていったのだろう。

親しくしていた住職の自死という経験は、やはり森岡へのインタビューのなかでも度々、回顧されて語られていた。それらは、自身の調査が、調査協力者であった住職にとって何をもたらしただったのかをふりかえる語りでもあった。

「オカミ」。そういう人でね。ですから、30カ寺くらいの組があっても、みんな本気には言えないんですね。言うと、問題が生じることがありますので、私が行くと聞くもんですから、普段の鬱憤を私に話してまして、行くと喜んでね。……奥さんに怒られたんですよ、「もっと何回も来てくれたら、死なないで済んだのに」って、そう言っていました。(2014.2.24)

私が行くことが息抜きになっていた。その地域で一番格の高い、偉い寺なんです。みんな下ですけど、よほど気をつけてものを言わないといけない。……オカミはあまり心を許してはいけなくてバカを言えない。私が行くと、対等の立場で言えるので、いつも待っていて。……親戚みたいな感じを持っていたんですね。(2017.11.24)

調査をとおした森岡の訪問は、調査される側であった住職にとって、その地域での寺格の高さゆえの苦悩から離れ、「対等な立場」で話せる「息抜き」の場をもたらししていた。「親戚みたいな感じを持っていた」という言葉からは築かれた親密さを感じるが、それゆえに、その後訪問できなかったことを「奥さんに怒られ」て「身が縮む思い」をしたという森岡の経験は、痛切に感じられる。そのときのことを、森岡は次のようにもふりかえている。

もう住職が亡くなっていて、ちょうど行く機会があって奥さんに会いましたけれども、本当に昔日の状態が全然なくて。……本当に心が痛みました。その後行ったときにはもう亡くなったと聞いてね。当時世話になった人はみんないなくなりました。思い出してね、よく私のような世話をしても役に立たない人間を世話してくれたなと思ってね。親身になって、何日いても構わないような状況でね。(2017.11.24)

調査経験は、調査された側の人びとにとって、記憶に残りつづけるだけでなく、調査後の年月のなかで起きた出来事によって、折に触れて強く思い起こされることもあるだろう。いまここで参照できるデータからは推測することしかできないが、寺格の高い寺院の住職としての人生において、怪我という苦しみが重なるなかで、彼のなかでかつての調査経験のことが思い出されていたかもしれない。少なくとも、住職の妻による「もっとちょくちょく来て話を聞いてくだされば」との語りからは、もしふたたび森岡と語りあう機会があったら何かが変わっていたかもしれない、という思いが感じとられ、かつての調査経験が住職らにとってもたらしていたもののおおきさがうかがえるのである。

## 5 結論

本稿では、森岡による1950年代のふたつの真宗寺院調査が、調査される側にとっていかなる経験をもたらし、その後にいかなる影響を残していったのかについて、考察を行ってきた。まず、研究者である森岡にとっては、正願寺での調査によって得た着想が、その後の真宗寺院研究の発展の契機となっただけではなく、調査協力者との関係性の構築をふくめた調査の方法論としても、この調査経験がその後の寺院調査へと生かされていったことがうかがえた。そして、本流院での調査によって得られた発見が、真宗教団研究の集大成へと結実したことから、彼の研究史のなかでも、初期のもっとも重要な調査経験となっていた。

そうした豊かな調査の過程は、調査される側の人びとにとって、かならずしも調査の目的や研究成果とは直接的には関連しないところで、それぞれにとっての調査経験をかたちづけていた。10代で正願寺での調査を間接的に経験した松原洋氏は、そこでの森岡やオルソン氏との出会いとやりとりが、英語でのコミュニケーションの難しさを感じさせ、アメリカに行ってみようという夢を育むきっかけとなったことを語っていた。そのことが、のちに海外留学を志し、そこで博士号を取得して研究者となる自身のライフコースを選択していくうえでのひとつの転機となっていた。また、30代で本流院での調査協力者となった住職の秦氏は、調査のなかで、あるいはむしろそれ以外の滞在過程のなかで、日頃は語りがたいことも対等な立場で語れる森岡の訪問を歓迎し、酒を酌み交わしながら息抜きの時間を過ごすとともに、親戚のような親しい関係を築いていった。のちに秦氏が亡くなり、妻によって森岡に語られた言葉は、調査をとおしてもたらされた森岡との出会いとやりとりが、忘れがたい経験となって記憶されつづけていたことを示していた。

これらの調査経験は、いずれも1950年代という日本社会の時代背景や、調査協力者たちが置かれていたそれぞれの地域での社会状況との関わりの中で意味づけられるものであった。このようにして、社会調査は、調査される側にとって、それぞれの土地で、それぞれの人生のなかでさまざまに経験され、さまざまに影響をもたらさうものだといえる。

本稿をとおして焦点が当てられたのは、調査においてもたらされるものの考察としては、やはり間接的・副次的な部分であるといえるのかもしれない。しかし、ある土地を訪れ、人びとに出会うフィールド調査においてもたらされるものは、往々にして「迷惑」や「被害」をふくんでしまう調査そのものや、最終的には「お返し」がめざされる研究成果そのものだけではない。つまり、いわばそれらの外側で交わされるやりとりや築かれる関係性をふくめて、その総体を、調査によってもたらされる調査経験としてとらえていくことが重要であると考えられる。翻っていえば、はじまりとしては、あるいは主目的としては調査としてとり結ばれた関係でありながらも、そのなかで間接的・副次的にさまざまな経験が調査する側にもされる側にもたらされ、その後の人生におおいに影響を与えていくことがあるのだ。そのことは、本稿においても示された調査協力者本人へのアプローチの困難といった限界をふくむものの、調査から長い年月が経過した現在から過去の社会調査をふりかえるリスタディをとおしてこそ、明らかになる場合も多いのではないだろうか。

過去の社会調査の蓄積をリサーチ・ヘリテージとしてとらえ、現代のわれわれがそれらを継承することをめざすうえでは、その時代に、その場所で、その人びとに対してもたらされた調査経験がどのような意味をもっていたのかを探ることが重要である。そのことによって、社会調査の

実際をより深く理解し、より多くを学ぶことができる。そのとき、研究成果それ自体だけではなく、関連するあらゆる資料やデータを照らし合わせながら、調査後の展開をふまえて探究することで、得られる知見はより豊かなものになるだろう。

注

- (1) 九学会連合とは、渋沢敬三の主導により、1947年に日本人類学会・日本民族学協会・民間伝承の会（1949年に日本民俗学会に改称）・日本社会学会・日本考古学会・日本言語学会の6学会が集って結成された六学会連合に、翌年加入の日本地理学会・日本宗教学会、そして1951年加入の日本心理学会をあわせた9学会によって構成された学術団体である。この九学会連合による特筆すべき戦後日本のフィールド科学における歴史的成果として、1950・51年の対馬調査を皮切りに断続的に実施されることになる、国内の諸地域を調査対象とした大規模な共同調査がある。とくに、戦後まもない1950年代においては、学際的かつ大規模なフィールド調査が実施されることはきわめて珍しく、各分野の多くの有力研究者が参加するとともに、調査対象となった地元をふくめて社会的関心が非常に高い出来事であった。詳しくは、坂野（2012）を参照のこと。なお、森岡が参加した1952・53年の能登調査は、対馬調査に引き続いて実施された第2回の共同調査にあたる。
- (2) 以下、引用する森岡の語りは、2014年2月24日に一橋大学にて、および2017年11月24日に森岡の自宅にて実施されたインタビュー調査のデータにもとづくものである。なお、いずれのインタビューで語られたものであるかについては、以下すべての引用において、それぞれの引用箇所の末尾に年月日を明記して示すこととする。
- (3) ここで引用する松原洋氏の語りは、2017年11月30日に正願寺にて実施されたインタビュー調査のデータにもとづくものである。

参考文献

- 安溪遊地 2012『「研究成果の還元」はどこまで可能か』宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版, 99-111.
- 池上広正・森岡清美・土屋光道 1955「宗教生活——鳳至郡町野町川西の真宗門徒団を中心として」九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会』平凡社, 209-244.
- 小林多寿子 2018『系譜から学ぶ社会調査——20世紀の「社会へのまなざし」とリサーチ・ヘリテージ』嵯峨野書院.
- 宮本常一 1972「調査地被害——される側のさまざまな迷惑」朝日新聞社編『朝日講座 探検と冒険7』朝日新聞社, 262-278. (再録:2008, 宮本常一・安溪遊地『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版, 13-34.)
- 森岡清美 1954「町野町川西における真宗門徒の教団内婚」『人類科学』6: 219-232.
- 森岡清美 1959「真宗教団における寺連合の諸類型」喜多野清一・岡田謙編『家——その構造分析』創文社, 319-346.
- 森岡清美 1960「真宗大坊をめぐる合力組織」『社会科学論集』東京教育大学文学部, 7:1-87.
- 森岡清美 1962『真宗教団と「家」制度』創文社.
- 森岡清美 2006「日本社会の歴史社会学」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』40:117-129.
- 森岡清美 2012『ある社会学者の自己形成——幾たびか嵐を越えて』ミネルヴァ書房.
- 坂野徹 2012『フィールドワークの戦後史——宮本常一と九学会連合』吉川弘文館.

桜井厚 2003「社会調査の困難——問題の所在をめぐって」『社会学評論』53(4):452-470.

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)